

埼玉県における公立中学校2年生の 自己肯定感に関連する要因の検討

—学校生活・経済状況・家族関係の視点から—

ホシナ ヤスコ
保科 寧子*

目的 本研究では、埼玉県において自治体内のすべての公立中学校に調査用紙を配布・回収することのできた2自治体のデータを用い、中学2年生の自己肯定感に影響を与えている要因の整理と一般化を試みた。

方法 2018年時点で埼玉県内の「埼玉県子どもの生活に関する調査」（総調査用紙配布数21,673世帯、有効回収率79.0%）の対象として選定された自治体のうち、自治体内のすべての公立中学校への調査用紙配布と回収が行われた2つの自治体のデータのみを抽出した1,533件を分析対象とした。調査用紙は、自記式無記名で生徒が日常生活について回答する部分と保護者が家庭の経済状況などを回答する項目がある。そのなかで自己肯定感に関する「自分には自信がある」「がんばれば良いことがあると思う」という設問への回答と家庭の経済状況、学校等の交友関係、家族との関係などの質問への回答との関連を χ^2 検定および連関係数を用いて分析した。

結果 自己肯定感の高さは、教員に良いところを認めてもらっている、学校に行くことが楽しみであるという設問に肯定的な回答と相関があった。また友人や家族に受け入れられていると感じている生徒も自己肯定感が高い傾向がある。一方で家庭の経済状況と自己肯定感には相関は見られなかった。学校へ行くことが楽しみかどうかや将来の夢があるかどうかも経済状況との関連は見られなかった。

結論 本研究の結果では、生徒自身の家庭の経済状況よりも学校生活での教員や友人との関係のほうが自己肯定感との関連が強かった。日本の公立中学校に通う生徒は、学校で過ごす時間が長く、かつ親しい友人も学校の友人であることが多く、中学校のコミュニティで受け入れられていると感じることが自分自身を認めることにつながっていると推測される。

キーワード 自己肯定感、公立中学校、教員、友人、承認

I はじめに

2016年に実施された第38回教育再生実行会議において、諸外国と比較して日本の子どもたちの自己に対する肯定的な評価（自己肯定感）の低さが指摘され、将来を担う子どもたちが自分の価値を認識し、自分の可能性に積極的に挑戦し充実した人生を歩めるように、この課題解決の必要性が示された¹⁾。自己肯定感の向上のた

めには自己肯定感に影響を与える要因やメカニズムを知る必要があり、いくつかの研究が実施されている。例えば「京都子ども調査」（2017年中学2年生対象）を分析した郭らによると、日本の子どもたちにおける自己肯定感に影響を与える要因として、性別、経済的要因、親や親戚との関係、学校での生活や友人の有無などが指摘されている²⁾。また、浜野による「平成29年度全国学力・学習状況調査を活用した専門的

*埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科准教授

な課題分析に関する調査研究」では、家庭の社会経済的背景（家庭所得、両親の学歴の3変数による合成指標）の高い児童生徒の方が各教科において全国学力調査の平均正答率が高い傾向にあることが示されており³⁾、加えて正答率の高い児童生徒は自己肯定感に関する質問用紙への回答傾向が肯定的であることから³⁾子どもの経済的環境と自己肯定感には関連のある可能性が示唆されている。また「大阪子ども調査」（2012年中学2年生対象）においては、貧困状況にある子どもは将来に対する夢を持ちにくい傾向が指摘されている⁴⁾。これらの先行研究は小規模調査であったり、学習調査や子どもの貧困の視点からの分析であった。そこで本研究では、埼玉県にて2018年に実施した「埼玉県子どもの生活に関する調査」のデータのうち、その自治体にあるすべての公立中学校に調査用紙を配布・回収することのできたデータを用いることで、より広い調査対象にて自己肯定感に影響を与えている要因についての整理と分析を試み、自己肯定感向上に向けての一助とすることを目指す。

II 方法

(1) 対象者

調査対象は、まず2018年時点で埼玉県内の「埼玉県子どもの生活に関する調査」（総調査用紙配布数21,673世帯、有効回収率79.0%）の対象として選定された自治体の公立中学校に所属しており、中学校を通じて配布された調査に協力した中学校第2学年生徒とその保護者である。本研究では、すべての調査対象の自治体のうち、自治体内のすべての公立中学校への調査用紙配布と回収が行われた2つの自治体のデータのみを抽出した1,533件を分析対象とした。調査用紙は、自記式で生徒が日常生活について回答する部分と保護者が家庭の経済状況などを回答する項目があり、いずれも無記名にて回収されている。データの基本情報は表1に示す。

表1 分析データの基本情報

	分析データ数(件)	構成比(%)	調査自治体総人口(2018現在)	自治体の特徴
合計	1 533	100.0	-	-
A自治体	1 322	86.2	約20万人	埼玉県内では大型産業都市との評価都市部と農村部が存在する高年齢率は全国平均と同等
B自治体	211	13.8	約3.5万人	高齢化が進行し年少人口は減少傾向近隣都市へのアクセスの良いベッドタウンである

表2 χ^2 検定に用いた設問と分類

設問	回答形式
自分には自信があると思う	1. とても思う 2. 少しは思う 3. 思わない
がんばれば良いことがあると思う	1. とても思う 2. 少しは思う 3. 思わない
自分は家族に愛されていると思う	1. とても思う 2. 少しは思う 3. 思わない
友達に好かれていると思う	1. とても思う 2. 少しは思う 3. 思わない
学校の先生から良いところを認められていると思う	1. とても思う 2. 少しは思う 3. 思わない
学校に行くのは楽しみですか	1. とても思う 2. 少しは思う 3. あまり思わない 4. 思わない
将来なりたい職業や夢はありますか	1. ある 2. ない
生活困難層の分類 ¹⁾	1. 生活困難層 2. 中間層 3. 非生活困難層

注 1) 生活困難層の分類の詳細は表3-1および表3-2を参照

(2) 分析方法

分析方法は、統計的手法とした。「埼玉県子どもの生活に関する調査」の質問項目のうち、自己肯定感に関する「自分には自信がある」「がんばれば良いことがあると思う」という設問への回答と家庭の経済状況、学校等の交友関係、家族との関係などの質問への回答との関連を χ^2 検定にて分析した。有意水準は5%とし、分析に用いた設問と回答様式は表2に示す。

なお「埼玉県子どもの生活に関する調査」では家庭の経済状況を生活困難層判定という指標を用いて3階層に分類しており、これを家庭の経済状況とした。具体的にはOECD（経済協力開発機構）の作成基準に基づいた貧困線以下の可処分所得であるもの、それに加えて、「衣・食・住」という基本的な生活の場面で課題が生じている家庭や、経済的な理由でライフラインに関わる支払いが滞っている家庭は、生活困難の度合いがより高いのではないかという仮説のもと、表3-1および表3-2に示す所得分類とライフラインに関する設問への回答結果という

2つの要素を使って、生活困難層、中間層、非生活困難層に分類している⁵⁾。

(3) 倫理的配慮

本研究は埼玉県が2018年に実施した「埼玉県子どもの生活に関する調査」のデータについて、埼玉県より匿名加工を行い個人の特定の出来ない状態でのデータ提供とその利用許可を受けた。データは研究機関内セキュリティシステムに守られたパソコンのみで扱い、これらのデータの取り扱いや分析方法については埼玉県立大学倫理委員会にて承認を得た(2020年1月23日承認番号19078)。

Ⅲ 結 果

(1) 調査対象者の基本属性など

回答者の性別は男性639件(41.7%)女性680件(44.4%)、無回答214件(14.0%)であった。一番親しくしている友達を問う設問への結果では、1,305件(85.1%)が学校の友人と回答している。無回答81件(5.3%)を除き、次に多いのはスポーツ・チームやクラブ活動の友人63件(4.1%)、親しい友人はいない23件(1.5%)と続く。また、保護者の回答した家庭の経済状況をⅡ。方法に提示した生活困難層判定にて分類した結果、貧困線以下の所得などに当てはまり、生活困難層と分類されたのは178件(11.6%)、中間層は328件(21.4%)、非生活困難層は1,027件(67.0%)となった。本研究とは貧困の分類手法が異なるが厚生労働省が発表した2018年の子どもの貧困率(17歳以下)は13.5%となっており⁶⁾、2%ほど本研究での生活困難層の割合が低かった。

表3-1 生活困難層の分類のための可処分所得(年収)と世帯員数の判定表(困窮判定要素1)

	分類Ⅵ 生活 困難層Ⅰ	分類Ⅱ 生活 困難層Ⅱ	分類Ⅲ +要素2が 2つ以上 生活困難層Ⅲ +要素2が 1つ以下 生活 困難層Ⅳ	分類Ⅳ 生活 困難層Ⅴ	分類Ⅴ 非生活 困難層	分類Ⅵ 非生活 困難層	参考 国基準
世帯員数 1人	60万円 未満	120万円 未満	180万円 未満	240万円 未満	300万円 未満	300万円 以上	122万円
2人	85万円 未満	175万円 未満	260万円 未満	345万円 未満	430万円 未満	430万円 以上	173万円
3人	105万円 未満	210万円 未満	315万円 未満	420万円 未満	525万円 未満	525万円 以上	211万円
4人	120万円 未満	245万円 未満	365万円 未満	485万円 未満	605万円 未満	605万円 以上	244万円
5人	135万円 未満	275万円 未満	410万円 未満	545万円 未満	680万円 未満	680万円 以上	273万円
6人	150万円 未満	300万円 未満	450万円 未満	600万円 未満	750万円 未満	750万円 以上	299万円
7人	160万円 未満	325万円 未満	485万円 未満	645万円 未満	805万円 未満	805万円 以上	323万円
8人	175万円 未満	345万円 未満	520万円 未満	695万円 未満	870万円 未満	870万円 以上	345万円
9人	185万円 未満	365万円 未満	550万円 未満	735万円 未満	920万円 未満	920万円 以上	366万円

注 可処分所得(年収)は保護者による回答

表3-2 生活困難層の分類のための困窮体験(困窮判定要素2)と2要素による生活困難層判定基準

生活困難層判定のための困窮体験(困窮判定要素2)	保護者回答の過去1年間に買えなかった経験・支払えなかった経験が、以下の7項目のうち2項目以上に該当(回答は1. あった 2. なかった 3. 払う必要なし) ①食料 ②衣類 ③電話料金 ④電気料金 ⑤ガス料金 ⑥水道料金 ⑦家賃
要素1および要素2による生活困難層判定基準	
生活困難層	可処分所得(表3-1)が分類Ⅰの世帯可処分所得(表3-1)が分類Ⅱの世帯可処分所得(表3-1)が分類Ⅲの世帯でありかつ要素2の項目が2つ以上あてはまる
中間層	可処分所得(表3-1)が分類Ⅲの世帯でありかつ要素2の項目が1つ以上あてはまる可処分所得(表3-1)が分類Ⅳの世帯
非生活困難層	上記に非該当

(2) 自己肯定感は学校生活に肯定的であることと相関がある

「学校の先生から良いところを認められていると思う」への回答(3件法)と「がんばれば良いことがあると思う」への回答(3件法)をクロス集計し χ^2 検定を行った結果、有意な偏りが生じていた($p < 0.01$)。この連関係数は $V = 0.337$ 、($p < 0.01$)であり、弱い相関が認められた。

「学校の先生から良いところを認められてい

表4 「自分には自信があると思う」と「学校の先生からよいところを認められていると思う」回答のクロス表

(単位 件)

	学校の先生からよいところを認められている			
	合計	とても思う	少しは思う	思わない
合計	1 485	487	777	221
自分には自信がある				
とても思う				
度数	356	218	116	22
調整済み残差		13.1	-8.6	-5.3
少しは思う				
度数	705	215	432	58
調整済み残差		-1.8	6.6	-6.9
思わない				
度数	424	54	229	141
調整済み残差		-10.4	0.8	12.6

注 χ^2 検定, $p < 0.01$, クラメールの $V = 0.460$, $n = 1,485$, 無回答48

表5 「自分には自信があると思う」と「学校に行くのは楽しみですか」回答のクロス表

(単位 件)

	学校に行くのは楽しみですか				
	合計	とても思う	少しは思う	あまり思わない	思わない
合計	1 485	511	668	223	83
自分には自信がある					
とても思う					
度数	357	210	116	25	6
調整済み残差		11.1	-5.4	-4.9	-3.7
少しは思う					
度数	700	228	367	86	19
調整済み残差		-1.4	5.4	-2.8	-4.6
思わない					
度数	428	73	185	112	58
調整済み残差		-9.0	-0.9	7.7	8.5

注 χ^2 検定, $p < 0.01$, クラメールの $V = 0.405$, $n = 1,485$, 無回答48

表6 「がんばれば良いことがあると思う」と「学校に行くのは楽しみですか」回答のクロス表

(単位 件)

	学校に行くのは楽しみですか				
	合計	とても思う	少しは思う	あまり思わない	思わない
合計	1 486	511	668	224	83
がんばれば良いことがある					
とても思う					
度数	984	446	417	96	25
調整済み残差		12.4	-2.8	-8.0	-7.2
少しは思う					
度数	410	58	220	102	30
調整済み残差		-10.1	4.2	6.5	3.6
思わない					
度数	92	7	31	26	28
調整済み残差		-5.6	-2.2	3.6	10.7

注 χ^2 検定, $p < 0.01$, クラメールの $V = 0.441$, $n = 1,486$, 無回答47

表7 「自分には自信があると思う」と「友達に好かれていると思う」回答のクロス表

(単位 件)

	友達に好かれている			
	合計	とても思う	少しは思う	思わない
合計	1 485	354	867	264
自分には自信がある				
とても思う				
度数	356	183	151	22
調整済み残差		14.0	-7.0	-6.6
少しは思う				
度数	704	138	490	76
調整済み残差		-3.6	8.3	-6.7
思わない				
度数	425	33	226	166
調整済み残差		-9.2	-2.6	13.6

注 χ^2 検定, $p < 0.01$, クラメールの $V = 0.478$, $n = 1,485$, 無回答48

ると思う」への回答（3件法）と「自分には自信があると思う」の回答（3件法）をクロス集計し χ^2 検定を行った結果にも、有意な偏りが生じていた ($p < 0.01$)。この連関係数は $V = 0.460$, ($p < 0.01$) であり、中程度の相関が認められた。「自分には自信があると思う」への回答に「とても思う」と回答した生徒は、「学校の先生から良いところを認められていると思う」にも「とても思う」と回答する傾向の強いことが示された。詳細は表4に示す。

「学校に行くのは楽しみですか」への回答（4件法）と「自分には自信があると思う」の各設問への回答（3件法）とをクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果も、回答に有意な偏りが生じていた ($p < 0.01$)。調整済み残差による

と「自分には自信があると思う」の設問に「とても思う」と回答した生徒は「学校に行くのは楽しみですか」にも「とても思う」と回答する傾向が強い。連関係数は $V = 0.405$, ($p < 0.01$) であり、中程度の相関が示された。この詳細は表5に示す。

「学校に行くのは楽しみですか」への回答（4件法）と「がんばれば良いことがあると思う」への回答（3件法）とをクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果も、回答に有意な偏りが生じていた ($p < 0.01$)。この連関係数は $V = 0.441$, ($p < 0.01$) であり、中程度の相関が認められた。調整済み残差によると「がんばれば良いことがあると思う」の設問に「とても思う」と回答した生徒は「学校に行くのは楽しみですか」

表8 「自分には自信があると思う」と「自分は家族に愛されていると思う」回答のクロス表

(単位 件)

	自分は家族に愛されている			
	合計	とても思う	少しは思う	思わない
合計	1 491	899	507	85
自分には自信がある とても思う				
度数	357	303	51	3
調整済み残差		10.9	-9.0	-4.5
少しは思う				
度数	707	423	266	18
調整済み残差		-0.3	2.8	-5.0
思わない				
度数	427	173	190	64
調整済み残差		-9.9	5.4	9.8

注. χ^2 検定, $p < 0.01$, クラメールの $V = 0.378$, $n = 1,491$, 無回答42

にも「とても思う」と回答する傾向が強く、逆に「がんばれば良いことがあると思う」の設問に「思わない」と回答する生徒は「学校に行くのは楽しみですか」に「思わない」と回答する傾向がみられた。詳細は表6に示す。

(3) 自己肯定感は友人に好かれていると思っていることと相関がある

「自分には自信があると思う」への回答（3件法）と「友達に好かれていると思う」への回答（3件法）をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、回答に有意な偏りが生じていた（ $p < 0.01$ ）。調整済み残差によると「自分には自信があると思う」に「とても思う」と回答した生徒は「友達に好かれていると思う」にも「とても思う」と回答する傾向がある。連関係数は $V = 0.478$ であり、中程度の相関がみられた（ $p < 0.01$ ）。この詳細は表7に示す。なお「がんばれば良いことがあると思う」への回答と「友達に好かれていると思う」への回答（3件法）をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果においても「がんばれば良いことがあると思う」という設問に「とても思う」と回答した生徒は「友達に好かれていると思う」にも「とても思う」と回答する傾向が生じていた。連関係数は $V = 0.317$ であり、弱い相関がみられた（ $p < 0.01$ ）。

表9 「自分には自信があると思う」と生活困難層判定のクロス表

(単位 件)

	生活困難層判定の分類			
	合計	生活困難層	中間層	非生活困難層
合計	1 496	175	320	1 001
自分には自信がある とても思う				
度数	358	38	71	249
調整済み残差		-0.7	-0.8	1.2
少しは思う				
度数	707	75	142	490
調整済み残差		-1.2	-1.2	1.9
思わない				
度数	431	62	107	262
調整済み残差		2.1	2.1	-3.2

注. χ^2 検定, $p < 0.05$, クラメールの $V = 0.084$, $n = 1,496$, 無回答37

(4) 自己肯定感は家族に愛されていると感じることと相関がある

「自分には自信があると思う」への回答（3件法）と「自分は家族に愛されていると思う」への回答（3件法）をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果も、回答に有意な偏りが生じていた（ $p < 0.01$ ）。調整済み残差によると「自分には自信があると思う」に「とても思う」と回答した生徒は「自分は家族に愛されていると思う」にも「とても思う」と回答する傾向がある。連関係数は $V = 0.378$ であり、弱い相関がみられた（ $p < 0.01$ ）。この詳細は表8に示す。

(5) 自己肯定感と家庭の経済状況は教員や友人との関係ほどの関連はない

「自分には自信があると思う」への回答（3件法）と生活困難層判定の結果（3段階）をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、回答に有意な偏りが生じていた（ $p < 0.05$ ）。調整済み残差によると生活困難層の生徒は「自分には自信があると思う」に「思わない」と回答する傾向がみられている。ただし連関係数は $V = 0.084$ であり、相関はほぼみられない（ $p < 0.05$ ）。この詳細を表9に示す。表7から読み取れる友人との関係や表4からわかる教員との関係と比べると関連は低いことがわかる。

また非生活困難層の生徒における「学校に行くのは楽しみですか」への回答は「楽しみでない」と回答する傾向が調整済み残差からやや低

いことが示されたが ($p < 0.01$), 連関係数は $V = 0.113$ となり, やはり相関はほとんどみられない ($p < 0.01$). 加えて「将来なりたい職業や夢はありますか」への回答 (2件法) と生活困難層判定の結果に対して χ^2 検定を行った結果についても, 回答に有意な差は生じていなかった ($p > 0.05$).

Ⅳ 考 察

中学2年生の自己肯定感と学校の教員から自身の良いところを認めてもらっていると感じることには相関があり, 教員から生徒一人一人への良いところを認めているというメッセージの発信が自己肯定感に影響を与えたと考えられる。また, 友人から好かれていることも同様に自己肯定感と相関があることから, 生徒の学校での人間関係を良好にすることで自己肯定感は向上する可能性がある。

本研究の結果では, 生徒自身の家庭の経済状況よりも学校生活での人間関係と自己肯定感との関わりが深い。その理由として日本の公立中学校に通う生徒は, 学校で過ごす時間が長く, 学校内での人間関係が生徒の心理状態に大きな影響を与えている可能性がある。本研究でも親しい友人は学校の友人であることが多かった。そのため所属する中学校のコミュニティで受け入れられていると感じることが自分自身を認めることにつながっていると推測される。

先行研究で示されているように子どもの貧困と自己肯定感の低さの関連⁴⁾⁵⁾も根深い課題であるが, 中学校内での承認や受け入れられているという実感は, 経済状況に関わらず広く中学生の自己肯定感を向上させる可能性が高く, 子どもたちが安心して居心地よく学校生活を送ることのできる環境整備が, 多くの中学生の自己肯定感を向上させるために重要であると考えられる。

また, 本研究の結果からは家族に愛されていると感じていることも自己肯定感の向上に寄与していた。一方で, 生活保護世帯の高校生のライフストーリーを通じて自己肯定感を読み解いた先行研究では⁷⁾, 子どもたちが家庭内で家事

役割を担うことにより, 学校では得られなかった自己肯定感を得ていることが指摘されている。あわせて貧困状態にある家庭の子どもは学業不振やいじめなどにより, 学校での自己肯定感を得られにくいことも示されている⁷⁾。自己肯定感だけに着目すると, 家庭に居場所を得て, 自己肯定感を得ていれば問題は無いようにも考えられるが, 学校で自己肯定感を得られないことにより通学する意欲が減少し, その結果低学歴となり, より高い知識や資格を要する収入の高い仕事を得る機会も失われてしまうので注意が必要だろう。

京都市で実施された本研究よりも小規模な先行研究²⁾では, 教員との関わりが自己肯定感へ及ぼす影響は小さいとされていたが, 本調査では友人関係よりも強い相関が示され, 公立中学に在籍する中学2年生にとって, 教員の承認が最も自己肯定感と関連が深いという結果となった。身近な大人である教員による生徒一人一人への目配りときめ細やかな声掛けなどの精神的支援は, 生徒の自己肯定感を育て, 様々な活動への意欲を引き出すことができるのではないだろうか。なお1950~60年代の教員と比較し, 2006年以降の教員は部活動をはじめ課題を抱える生徒の個別支援やカウンセリングなど生徒の直接指導に割く時間が有意に増加している点が指摘されており⁸⁾, 教員の生徒への影響力が増大している可能性も考えられる。

クラス担任や部活顧問などを通じて特定の教員が生徒の承認を行うだけでは, 教員の負担は大きく, また生徒理解のための視点の多様性が失われる恐れもあるので, 一人一人の生徒へ目の行き届きやすい新たなシステム検討が必要だろう。スクールソーシャルワーカーなどの専門職に加え教員の補助を行う補助員⁹⁾やボランティア等を導入している地域¹⁰⁾もあるのでこれらの活用も一考である。特別なニーズを持つ児童や生徒の支援で用いられているチームアプローチも取り入れられると良い¹¹⁾。そして複数の目で生徒に目を配り, 多様な立場から学力だけでなく生徒の様々な個性を承認することができれば, 子どもたちは学校でより多くの大人に

認められ自信をつける機会を得ることができるのではないだろうか。

本研究は、埼玉県の農村部から都市部の中学校まで広く調査対象とした市町村を分析対象に選定したため、中学校の自己肯定感との関わりについてある程度の傾向をみることはできるのではないかと考える。ただし、生活困窮や不登校などにより中学校へ登校していない生徒は調査対象に含まれないので結果の解釈には留意が必要である。また多変量解析に対応したデータではなかったため単相関係数のみの分析となっている。今後は複数地方での調査や多変量解析、質的研究なども組み合わせる必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省. 日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について (<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/chousakai/dail/siryou4.pdf>, 2021.1.14) 2021.2.19.
- 2) 郭芳, 田中弘美, 任セア, 他. 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究: 京都子ども調査をもとに. 評論・社会科学; 2018 126: 15-32.
- 3) 国立大学法人お茶の水女子大学. 保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究. 平成29年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/10/1406896_1.pdf) 2021.2.24.
- 4) 阿部彩, 埋橋孝文, 矢野裕俊. 同志社大学. 大阪子ども調査結果の概要 (2014年2月). <https://gpsw.doshisha.ac.jp/osaka-children/osaka-children.pdf> 2021.2.24.
- 5) 埼玉県. 子どもの生活に関する調査結果の概要. (<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0607/library-info/20190702.html>) 2021.2.19.
- 6) 厚生労働省. 2019年国民生活基礎調査の概況; II 各種世帯の所得等の状況 (<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/03.pdf>) 2021.2.19.
- 7) 林明子. 生活保護世帯の子どもの生活と進路選択: ライフストーリーに着目して. 教育学研究 2012; 79(1): 13-24.
- 8) 神林寿幸. 課外活動の量的拡大にみる教員の多忙化—一般線形モデルを用いた過去の労働時間調査の集計データ分析—. 教育学研究 2015; 82(1): 25-35.
- 9) 一般財団法人東京学校支援機構. TEPRO Supporter Bank. (<https://www.tepro.or.jp/applicant/application.html>) 2021.2.25.
- 10) 鈴木廣志. 学校支援ボランティアとの協働. 日本学習社会学会年報 2007; 3: 38-40.
- 11) 當山裕子, 桃原のりか, 小笹美子, 他. 保健師が認識する学童期の発達障がい児支援の必要性. 日本公衆衛生看護学会誌 2016; 5(1): 21-8.